

Study Abroad

世界とつながるって、こんなに面白い！

Reflection



県企画プログラム

県が提供する7日間の体験
海外留学最初の第一歩



個人留学支援

自ら企画する個人留学
現地で信州の良さを発信



ウィングシェア・プログラム

留学機運醸成のため
留学体験をシェア





【日程】 令和6年(2024年)11月3日～11月9日(7日間)
【参加者】 44人
【目的】 外務省が推進する「対日理解促進交流プログラム(JENESYS)」の一環である日韓間の交流事業に参加し、訪韓プログラムの様々な交流において日本の文化や社会・魅力等を積極的に伝えとともに、韓国の文化や社会に触れることで同国への理解も深め、日韓の高校生同士の相互理解を促進する。



○高校生との交流

突馬(トルマ)高等学校、韓国観光高等学校、韓国アニメーション高等学校を、分かれて訪問し、授業と一緒に参加したり、市街を散策したりして交流。帰国後も、SNSを通じて連絡を取り合ったりしています。



○文化体験(韓服体験、K-POPダンスレッスン)

憧れの韓服とK-POP。



○大学生との交流

東国(トングク)大学を訪問して日本学科の講義を聴講し、韓国人大学生や、日本人留学生と交流。



○活動のまとめ発表

最終日に、1週間を振り返りました。皆、気付くと、積極的に発言するようになっていました。



竹井 南美子さん(Namiko Takei)

長野南高等学校 2年(留学時)

自分を見つめ直す機会になった日韓交流

このプロジェクトに参加する前は、K-POPアイドルなどから得る、韓国の表面的な事しか知りませんでした。それで韓国が好きだと言っていました。そして、韓国語も軽い会話程度しかできませんでした。それでもなんとかなる、そう思っていました。参加してみると、翻訳アプリなどを駆使することで、意思疎通は確かになんとかなりました。しかし、現地の方達と心から会話ができていく気がしませんでした。訪れた場所、人々の話から韓国の歴史や現在の韓国の情勢を知り、日韓関係についてある程度学ぶことができました。そうしたことで、今まで韓国の事をほとんど知らないのに韓国が好きだと言っていた自分を恥ずかしく思うようになりました。帰国後、私は日韓それぞれの国について、その国の過去と現在の出来事を知った上で、それらも含めてお互いの国を好きになるべきだと考えました。

現地の高校や大学を訪問し、まず驚いたのが、韓国の方たちの日本語力の高さです。韓国が学習を熱心に行う国とは知っていましたが、私とほとんど同じ年齢で、多くの人が多言語を使いこなしている姿を目にして、そのレベルの高さに圧倒されました。韓国アニメーション高校での交流では、普段日本の学校ではやらないChat GPTを利用した動画作りやコッシン作りなどを行い、日本との違いを感じました。この学校は日本でいう私立高校や専門学校で、施設がかなり充実していて、学生が自ら映像などを制作しておりその技術の高さにも驚きました。韓国の学生の積極的に学習し、物事に取り組む姿勢が、日本でも多く見られるようになれば良いと思いました。



K-POPダンスレッスン体験で文化を学ぶ



現地高校生との交流

今後の指針となった韓国留学

つばさプロジェクトへの参加前と後で、自分でも分かるほどの変化が2つありました。1つは積極的になったことです。韓国を訪れてみて、自由行動の時間が多く、何かと自分がすることを自分で決めて行動することが多かったです。訪韓した直後はとりあえずみんなについて行くばかりで、周りの意見に流されるままでした。しかし、韓国の学生との交流やフィールドワークなどのさまざまな経験をしていくうちに「自分はあれがしたい」と自分の意見を常に持つようになりました。もう1つは視野が広がったことです。韓国の方々だけでなく、同じつばさプロジェクトに参加したメンバーと活動をしていくうちに、新しい考え方や価値観を吸収することができました。学校では得ることのできないものを得ることができ、貴重な経験になりました。

自分たちと同じ世代の韓国の人と交流して強く感じたのは、言葉の壁、文化の違いです。私は韓国語が全くわからないまま訪韓し、それをとても後悔しました。私は海外に行くのが初めてで、意思疎通できない感覚を初めて感じました。日本語を話せる韓国の学生に頼りっぱなしになってしまいました。自分と同じ高校生が独学で日本語を勉強していると聞き、衝撃を受け、私も興味のあることを深く学びたいと思いました。また、食文化や常識が異なり、驚きの連続でした。しかし、文化の違いは決して悪いものではありません。日本だけの特徴、韓国だけの特徴があり、会話をしたときに文化の違いで盛り上がりました。このような日韓の「違い」から、異文化理解の楽しさなどの多くのことを知ることができました。



現地高校生と伝統的な靴「コッシン」作り



大韓民国歴史博物館で景福宮をバックに

実力試しの一週間

今回この信州つばさプロジェクトで渡韓する以前から、韓国の歴史や文化に興味があり独学で韓国語を学んでいました。日本だと実際韓国人の方と話す機会が少なく、独学で学んでも使わなければ意味がないし上達しないと感じ、参加しました。私は日本から出ることで不安と緊張が大きかったのですが、その分内面的な成長ができたと思います。語学面では、韓国語しか現地の方とコミュニケーションをとる方法がないため、勉強としては非常に良い環境でした。そんな環境の中で自分の言葉で伝わるという喜びと実力不足を感じた1週間になりました。

この留学を通して自分の興味をもっと引き出せたとし、自分の韓国語の改善点も見つけれられたので、今後は、まず、韓国語能力試験を受けて、結果をもとに勉強を進め最高級の6級を取りたいと考えています。そのために、大学で韓国語をはじめとした、東アジアの言語について学べる学科に進学をし、独学では身につけられないような知識を得たいです。その上で、歴史、文化について理解を深めようと思います。それに加え、留学にも積極的に参加し、韓国だけでなく他の国も訪れて自分の潜在意識を変えたり、新たな自分を見つけたりしたいです。その後は、日本と他国を言語でつなげられる職業に就きたいです。



初めてできた韓国人の友人



東国大学で大学生と交流



【日程】 令和6年(2024年)12月8日～12月15日(8日間)

【参加者】 14人

【目的】 音楽の道を志す生徒を対象に、音楽の都・ウィーンにて一流の音楽や芸術に触れスキルアップを図る機会とする。プロの個人レッスンにより各自の演奏技術の向上を図り、音楽博物館内にてソロ・コンサートの機会を設け、レッスンの成果を披露する。また、音楽の史跡や、オペラのリハーサルなどを視察するほか、ウィーン音楽学校(ムジーク・ギムナジウム)で授業を見学・交流し、同じ音楽を志す者同士の交流会を通じ、国際的な感覚を養う。



○音楽の史跡巡り

シェーンブルン宮殿や美術史博物館などを巡り、音楽の歴史に触れました。



○ウィーン・ムジーク・ギムナジウム(音楽学校)訪問

授業見学と生徒との交流。



○現地の音楽家による個人レッスン

ウィーンで活躍する音楽家による個人レッスンを受講しました。技術はもちろんですが、音楽との向き合い方を指導していただきました。

○音楽博物館「モーツァルトハウス」研修とプライベートコンサート実施

個人レッスンの成果を発表するため、コンサートを行いました。周囲に行きかう人たちに、自作のチラシを配ってコンサートに来てもらえるよう声を掛けました。



今井 彩寧さん(Ayane Imai)

屋代高等学校 2年(留学時)

音楽を楽しむ街

ウィーンは、とにもかくにも「街中が音楽を楽しんでいるみたいな都市だな」という印象が強かったです。街のあちこちからストリートパフォーマンスの音色が聞こえてきたり、「今からクラシックコンサートします！」で、そのまま会場に来てくれる方が沢山いたり、とにかく音楽が生活に溶け込んでいて、演奏や鑑賞がとても身近なものに見えました。私のイメージでは、ウィーンの人々が敷居の高いクラシックやコンサートに慣れているという感覚でしたが、実際は音楽のほうがとてもカジュアルなものとして捉えられていて、そのギャップが私にはすごく新鮮でした。

個人レッスンやミニコンサートの実施をとおして、音楽を学ぶこと、演奏すること、鑑賞すること、全ての前提に「楽しさ」があって良いのだなということ再認識しました。もちろんこれまでも音楽を楽しんでやってきましたが、個人レッスンでの先生のちょっとした仕草やコンサートのお客さんの視線などを見ていると、ウィーンでは驚いてしまうほど肩肘張らず、フランクに音楽と接しているという印象が強かったです。発表の場では今までで一番良い演奏をしなくてははいけない、といったプレッシャーが無意識ながら自分の中にあつたことを旅行の中で自覚し、良い演奏をするぞ！という意気込み程度の、軽やかさを持ったマインドでも良いのかもかもしれないと思えるようになりました。



ムジークギムナジウムの学生との交流



コンサートでの発表

憧れのウィーンへ

ウィーンでは、芸術と街が強く結びついているという印象を受けました。街の至る所で音楽が奏でられ、街の人々もそれを楽しんでいる様子でした。他にも大きな美術館や古楽器博物館などもあり、芸術が人々にとって、とても身近で大切なものなのだと強く感じました。また、ウィーンの至る所で偉大な作曲家が過ごしたアパートや建物、葬儀が行われた教会などをたくさん見ることができ感動しました。コンサートを鑑賞するため、ウィーン学友協会の黄金のホールを見て、その豪華さと美しさに驚きました。ウィーンでいかに音楽が価値のあるものなのかがよくわかりました。

個人レッスンでは表現や音の出し方について沢山指導をしていただきました。音を出すときの口の形や息の使い方、曲に対してどのように表情を付けていくかなど、とても丁寧に教えていただき勉強になりました。指導の際、先生が曲の感情を体現して下さったので、曲に対して、表情やイメージを付けやすくなりました。他にも、自分の演奏の良い点を先生が言ってくださり、嬉しかったし、新しい発見も得られました。ミニコンサートでは、運営や企画を生徒参加者がやることになっていたので大変なこともありました。自分たちが手掛けたコンサートに、現地の方が70名ほど来て下さり、とても嬉しかったです。今回の経験で学んだことを自信に繋げ、今後の活動に生かしていきたいです。



個人レッスンにて



ミニコンサートでのセッション

「生きた芸術」に触れた留学

ウィーンについて、日本との芸術に対するスタンスの違いに驚きました。日本では芸術というイメージが高いイメージが定着していますが、ウィーンでは気軽に「生きた芸術」に触れることができます。例えば、19歳未満は美術館、博物館に無料で入れたり、道端でチラシを配っただけのコンサートを気軽に聞きに来ていただいたりして、ウィーンの芸術への密接さに強く感動しました。日本にも、世界に誇れる芸術品は数多くありますが、それを敷居が高いからという理由で多くの人に見てもらえないのはとても惜しいとも思いました。人々と芸術との関係性についてウィーンから学べることは多いと感じました。

個人レッスンでは、発声や発音などこれからの練習に生かすことのできることをたくさん教えていただきました。その中でも表現についてのお話が特に印象に残っています。それは曲の情景を思い浮かべながら演奏することの大切さについてで、意味を浮かべるとフレーズが立って聞きやすくなったり、曲の厚みが増したりすることを実感しました。また、現地のガイドの方に、先生と生徒の関係性が対等であることを教えていただきました。ウィーンでは対等な関係の中で活発な意見の交換があるそうです。慣れない距離感到に困惑しましたが、新鮮な気持ちでレッスンに臨むことができました。

コンサートでは日本での練習と現地でのレッスンの成果を発揮できました。私たちの発表を聞いてくださった現地の方から拍手をいただいたとき、何とも言えない達成感と多幸福感に包まれたことを鮮明に覚えています。コンサートを運営できたことも、貴重な経験です。



シェーンブルン宮殿



ミニコンサートでの全体合唱



【日程】 令和7年(2025年)3月2日～3月8日(7日間)

【参加者】 24人

【目的】 SDGsの要素について各自テーマを決め、台湾で様々な活動を行いながら探究する機会とする。長野県教育委員会と連携協定を結び高雄市を訪問し、台湾の高校生との交流やホームステイ等により台湾の文化に触れ、異文化理解を深める。また、日本台湾交流協会等の公的機関への訪問を通じ、SDGsの各自のテーマに沿って理解を深めるとともに、今後の学習や進路選択につなげる。現地関係者にSDGsの項目についてインタビューや意見交換を行いテーマについて理解を深める。



○新北市立淡水高級商工職業学校(専門学科の高校)での交流

花束作りや唐揚げ作りの実習を体験した後、現地高校生と市内研修を行いました。その日は、校内の実習用宿舎に宿泊しました。



○高雄市教育局表敬訪問と 高雄市立前鎮高級中学での交流

授業と一緒に参加し、豆花(トウフア)を作りました。



○大学生との交流

銘傳大学で日台の文化を紹介し合った後、台北市内をB&S班別研修を行いました。



酒井 拓輝さん(Hiroki Sakai)

伊那北高等学校 2年(留学時)

世界と自分をつなげる旅

台湾でのホームステイは本当に楽しい時間でした。私のホストファミリーは、英語を話せるのはペアを組んだ現地の高校生だけで、彼の両親は中国語しか話せませんでした。しかし、言語でのコミュニケーションができなくても、2人からの思いやりはとても感じました。それは2人が感情を表情や行動に表してくれたからかなと思いました。私も、日本人同士で会話をする時も表情や思いやりを發揮していきたいなと思いました。B&Sでは大学生とたくさん会話しました。私のグループの大学生は日本人の留学生で、ひたすら楽しく観光をしましたが、その後現地の大学生と話し、英語の学習方法や趣味について聞きました。彼は本当に努力を積み重ねて現在の英語力をつけたそうなので、自分もたくさんの努力を重ねたいです。

今回のプロジェクトをとおして、海外での活動を視野に入れることができました。やっぱり世界は広いです。私は理系なので海外への留学はなかなかハードルが高いと思っていましたが、現地で交流した日本からの留学生は理系でした。その人はただ英語を学びたいから留学したと言っていました。そう聞いて選択肢は理系とか関係なく私が思っているよりずっと広がっていると感じました。現時点での私の目標は、志望大学に合格して工学に関わる仕事をすることです。しかし、世界での交流やマーケットを視野に入れることができれば自分の人脈や経験も大きくすることができるし、何よりそちの方が絶対楽しいと思います。この旅で本当に色々な意味で世界観が変わりました。自分の可能性を信じて世界を目指していきたいです。



ホストファミリーとのひととき



日本人の留学大学生との交流

台湾で感じた多文化尊重への希望

私が学んだことは「相手の言語を話せなくてもお互いに相手を理解しようとする姿勢や、相手に伝えたいという態度を持つことで思いを伝え合うことができること」です。ホームステイの日にペアとホストマザーと散歩に行った際に、ペアから以前に長野県にホームステイした時の話を聞きました。ホームステイ先の日本人に「台湾って中国にある場所？」と聞かれたことがショックだったという話を聞かせてくれました。その後、翻訳機を通して複雑な会話が続き、日本では台湾についてのどのような教育を受けるのか聞かれました。自分が知らないだけで台湾の人たちが母国について複雑な思いを抱えていることを学びました。私は、日本人だから的確なことは言えないけれど台湾の人の意見が尊重されることを願っていると伝えました。これが台湾語で伝えられたらどれだけ良かったかと思いましたが、ペアが翻訳機を通して「あなたは良い国際的な視野を持っている」と伝えてくれました。この日のことは一生忘れられないと感じたと同時に、たった一晚の出会いでここまでお互いを理解し合えるのかと、多文化社会への期待を感じました。もちろん、私が台湾語を話せたらそれが一番のコミュニケーション方法であり、相手への尊重だと思います。ですが、私とペアのお互いへの心を開こうとする気持ちが芽生えた結果なのだろうと思いました。



一生に一度の出会い



忘れられない思い出をくれた大切な仲間たち

言語と文化の探究留学

参加以前の私は、英語が得意ではなかったため、上手く英語が出てこない時は翻訳アプリを使って対処できればいいと思っていました。しかし実際に留学をしてみて、拙い話し方や簡単な単語の組み合わせだとしても、できるだけアプリを通さず、共通言語で会話をすることの楽しさを知りました。また、今回はお互いの母語ではない英語で主に会話をしたのですが、台湾の方々が台湾語でよりスムーズに話しているのを聞いて、共通言語だけでなく、その国の言葉も話せるようになるとより楽しく会話ができるのではないかと気づき、今まであまり興味のなかった他国の言語にも興味を持てるようになりました。

私は現在、日本語や日本文学についてより詳しく学べる大学への進学を目指しています。今回の留学を通して、日本語の助詞や助動詞の難しさや、ジェンダー等の他国と異なる独自の人間性や考え方、そこから生まれる文学作品の傾向など、今まで考えたことのなかった観点での新たな発見が多くありました。大好きな日本語や日本文学についてより探究し、学び、もっと好きになり、また、他国の文化を知り、理解することで見えてくる日本の特色をも踏まえ、国の垣根を超えて日本の良さを理解した上で、日本の魅力を伝えていける人になりたいです。



現地の高校生徒との交流



現地高校で日本文化の紹介



【日程】 令和7年(2025年)2月4日～2月10日(7日間)
【参加者】 29人
【目的】 カンボジアでのフィールドワークを通して、その歴史や文化に触れるとともに、戦争や内戦が教育に与えた影響について学び、2030年の社会の方向性を考える SDGs の要素について理解を深める機会とする。現地で遺跡の修復にあたる日本人チームを訪ね、文化財保護と国際協力について考える。カンボジアの小学校で運動会を企画・運営するプロジェクト活動を行う。加えて、子どもたちが暮らす村の様子等を視察し、持続可能な開発目標達成に向けた各自のアクションプランをイメージする。



○カンダール州の小学校での交流

小学生と一緒に授業に参加しました。



○OPSE生徒との交流

文化を体験したり、これからの地球のことを一緒に考え、発表したりしました。



○歴史と内戦についての学習

講演を聞いたり、博物館を訪問したりして、学びを深めました。



○アンコール遺跡見学

遺跡修復についての説明を聞き、アンコールワットを見学しました。



杉浦 ころろさん(Kokoro Sugiura)

軽井沢高等学校 1年(留学時)

成長の第一歩

参加前は、カンボジアについての情報が限られており、特にその歴史や文化を通じた現在のカンボジア人の考えや思いなどについて深く知ることができていませんでした。しかし、実際にカンボジアに足を運び、現地の人々と直接交流することで、その国の歴史や伝統の深さに触れることができました。特に、ポル・ポト時代を生き延びたチア・ノールさんからは、当時の強制収容所内での非人道的な扱いを受けていた生活の話や、子供に対して農家や収容者の監視役になることを強制する教育方法の話などのリアルなお話が聞けました。また、カンボジアの人々はとても温かく、高校生たちは初対面でもフレンドリーに接してくれました。彼らは困難な時期を経験しながらも今でも強いコミュニティ意識を持っていて、日々の生活を楽しんでいる様子がとても印象的でした。

私は将来、中学校の教師になりたいと思っています。カンボジアの生徒たちは、日本の生徒たちとは異なるバックグラウンドを持っており、学習環境も異なります。このような環境に身を置くことで、生徒の多様なニーズに柔軟に対応する力が必要なんだなということに気が付けました。教師としても、全ての生徒が自分のペースで学べるようなサポートが必要だと実感しました。また、カンボジアの学校では、教材や設備が限られている中で、先生たちがホワイトボードや地図、写真などを使い創造的に授業を行っていた姿が印象的でした。私も将来、限られた資源でも効果的な授業を提供できるような工夫をしなければならぬと感じました。



小学生とカンボジアの食べ物について学ぶ



世界遺産アンコールワット

コミュニケーションは笑顔から

PSEでの交流を通して一番感じたことは、カンボジアの学生は学習意欲が高いということです。たくさん話し合いをしたり、積極的にみんなの前に出て発表をしたりしている姿が印象的でした。しかし、就学率は上がってきているものの、教員・教室不足であったり、田舎やスラム街の子どもたちはまだ学校に行けていなかったりと、全員が質の高い教育を受けられているわけではないことを学びました。私たちが当たり前と思っていた生活は、当たり前ではないと改めて知る事ができました。またPSEの方々話し合いをする中で、PSEの英語教育は日本より進んでいると感じました。知識として知っているだけでなく、普段から英語を使うことで、私も語学力向上につなげたいと思いました。

私の大きな目標は、どんな環境にいる子供たちでも自由に学べる空間をつくることです。私は、実際にカンボジアの教育現場をみて、教育の質が低いこと、経済的、精神的な理由から学校に行くことができていない子供がいることなどを学びました。これは、日本の教育にも通ずるところがあると感じました。そこで、私はどんな事情を抱えた子供たちも自由に教育を受けられる環境をつくり、学ぶことが楽しいと感じてもらいたいと思うようになりました。これを達成するために、高校卒業後には大学で教育学について学び、将来はこのプログラムで培った知識とコミュニケーション能力をいかして、教育の発展のために自分に何ができるか考えて行動したいです。



My Friends in PSE



現地の小学生と交流 Cute!!

言語と文化の探究留学

参加前の自分は、すぐにこれはこうだと考え固定概念に縛られていました。カンボジアに対してのイメージも偏見に縛られていました。しかし帰国後、私はすぐに決めつけるのではなく、広い視野で物事を見るようになりました。グローバルな視点で物事を見ることができるようになったと思います。なぜそのような変化が起きたのか、それにはやはり現地の高校生との交流や企業訪問、トゥールスレン博物館の見学などが大きかったと思います。これらの体験を通じて自分の中にまとわりついていた【常識】というものがどんどん離れていくことで、自分の中で変化というものが生まれました。

今の目標はカンボジアに自分の力で行き、PSEで交流して仲良くなった友達と再会すること、そしてカンボジアで見た美しい風景を今度は自分の力で見に行くことです。そのために私は、将来の進路として大学で英語を学び、国際交流について学びたいと思っています。そして自分に必要な語学力や海外に対する理解などを深めて、もう一度カンボジアという国を訪れ、PSEで感じた語学力の壁を克服したいです。更に東南アジア以外の地域も訪れて、その国の現地の人々とコミュニケーションを取り、自分の中の価値観をアップグレードしていきたいと思っています。



現地で交流した小学生と



PSEでカンボジアちまきを食べる



【日程】 令和7年(2025年)2月16日～2月22日(7日間)
【参加者】 24人
【目的】 経済発展が著しいマレーシアで、長野県を拠点にしながもグローバルに展開する企業等でのインターンシップを通して国際感覚を養い、グローバル時代の経済を体感する。また、現地の高校生や大学生と交流する体験を通じて、多民族国家マレーシアでの異文化コミュニケーション力を養う。



○現地企業でのインターンシップ

フードビジネスコースとツーリズムコースに分かれ、インターンシップに取り組みました。日系企業の視察、ホテルでの業務体験や旅行会社でのツアープランニングなどを行いました。



○大学生との交流

B&Sプログラムで市内を散策しながら交流しました。

○OSMK Jalan Ipoh校での交流

日本の文化として折り鶴を紹介し、一緒に折りました。



○文化体験

マレー料理を体験しました。



田中 星乃さん(Hono Tanaka)

須坂創成高等学校 1年(留学時)

留学を経ての成長

参加する前は、あまり勉強に対してやる気が出ませんでした。将来やりたいことがあっても勉強に手がかず、行動に移すことができませんでした。他国の文化や現地の学生と触れ合えたことにより、勉強に対するモチベーションが上がりました。現地で勉強する意欲が湧き、行動に移すことができました。帰国後、課題を家に持ち帰ったり、机に座る事から努力をしていこうという気持ちになり、参加前とは勉強に対するの取り組み方が変わったと感じています。そして、自分のやりたいことが明確になり、今やるべきことは勉強だと改めて気づくことができました。マレーシアに行き沢山のことを学べて良かったです。

今の目標は、将来の夢である管理栄養士になるために、勉強を頑張ることです。そして、マレーシアで学んだことを今後の学校生活に活かしていくことです。例えば、物事の見方や価値観など世の中には色々な人がいるということを知ることができました。特に相手を尊重する気持ちを持つことが、今の目標となりました。今後の進路については、マレーシアでの体験を経て、夢を実現する気持ちがさらに強くなりました。そのためにも、この経験を無駄にせず、自分の好きなことを仕事にしたいと思いました。また、自分のやりたいことを肌で感じる事ができ、マレーシアに行く事に挑戦して本当に良かったと思いました。



現地高校生との交流



マレーシアの文化を知る

夢へのつばさ再発見の旅

日本で生活していて私は周りに合わせようとする気持ちが大きく、自分の意見や行動を制限し、同調圧力に屈していましたが、マレーシアの多文化共生社会で生活してみて、食、信条、性格などの要素が人それぞれで良いのだと感じるようになりました。各々のパーソナリティーを肯定し、受け入れてくれる環境は本当に居心地が良かったです。みんな違って当たり前という感じでした。また、一緒にマレーシアを訪れた長野の仲間たちと接して大きな刺激を得ることができました。

現地の学校訪問で、マレーシアの高校生とコミュニケーションをとりました。現地の授業内容を教えてもらうと一人一人の個性が尊重されていて、自主性にあふれた教育がされているのだろうと感じました。異文化交流プログラムで日本の文化である「折り紙」でつるを一緒に作ったときも、一生懸命取り組んでくれて、話も弾み、一生の友人になるほど親交を深めることができました。

ホテルでのインターンシップでは、朝食会場でのウェイトレスをしました。そこでは宗教上の理由で豚肉を食べない方や、完全菜食主義者で卵を食べない方など日本で生活していてなかなか見られない方々に会うことができ、多種多様な食のあり方に気づかされました。また、朝食会場ではそういった方々のためのメニューや配慮がしっかりしていて感銘を受けました。インターンシップ生として来ていることもあり、私たちに興味を持って話しかけてくださるお客様もいました。



郷土料理ナシレマを手で実食



日本文化を紹介 折り鶴、完成

新しい視点を得たマレーシア

私はこのプロジェクトに参加するかどうかについて、とても悩んだ上で参加を決めました。1週間も知り合いがない状態で知らないところへ行くのがとても不安だったからです。しかし、実際に参加をし、帰国してみればよい思い出しかなく、「参加してよかったな」と心の底から思いました。自ら行動しようというチャレンジ精神をすごく高めることができたと思います。やはり何にでもまずはチャレンジすることがとても大切なことなのだと改めて感じました。また、海外へ行けば自然と英語が話せるようになるものと安易に考えていましたが、語学を上達させるためには、自分から積極的にコミュニケーションすることが大切であるということ学びました。また今回の留学を通じて、その国の文化を知り、そこで暮らす様々な人と積極的にコミュニケーションすることにより、逆に自分自身を知ろうとする気持ちが高まり、「自分が本当にやりたいことは何か」ということを深く考えるきっかけになりました。

HOKUTOマレーシアとイオンマレーシアでインターンシップをさせていただいて、私が今回のプロジェクトで一番学びたかった、日系企業がグローバルな環境でビジネスをするうえで重要なこと、求められることについて深く学ぶことができました。重要なのは、異文化を認め合い尊重し、それに柔軟に適應していくこと、併せて高いコミュニケーション能力が必要であると感じました。



HOKUTOマレーシアにて



マレーシアで出会った友人と



個人留学支援プログラム

【令和6年度 12人】

林 風佳さん(Fuka Hayashi)

諏訪清陵高等学校 2年(留学時)

【研修地】ネパール

【研修テーマ】開発途上国の現状を肌で感じ、課題を考える

出発前、自分は主に開発途上国の教育や貧困について特に問題を感じていました。ただ、自分の関心が教育学に向きすぎていたが故に、他にも問題は山積みであり、解決すべきことで自分も解決のために動けることがあるということに意識が向いていませんでした。今回のネパールへの訪問をとおして、目的である「開発途上国の現状を肌で感じ、課題を考える」ことができたと思います。今まで、自分が知らず、見えていなかった開発途上国の課題、例えば、出稼ぎ目的で日本に来る技能実習生のこと、ストリートチルドレンの存在、水をはじめとする衛生環境の問題、カーストによる格差や差別の存在、道路整備が不十分である問題等を知ることができました。



探究の成果を発表

金澤 千晴さん(Chiharu Kanazawa)

松本県ヶ丘高等学校 2年(留学時)

【研修地】マルタ共和国

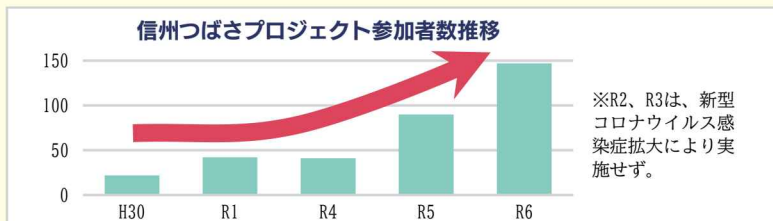
【研修テーマ】英会話力の向上とヨーロッパの歴史的建造物

ホームステイでは、マルタの暮らしを知ることができました。一番衝撃的だったのは、トイレにトイレットペーパーを流せない事です。不便で仕方ないし、使ったペーパーのゴミ箱を開ける時は毎回しんどかったけれど、郷に入っては郷に従えをモットーに乗り切ることができました。また、海外では多い事ですが、水道水が飲めないというのが生活で困りました。水を毎回買いましたが、猛暑のためとても減りが早く、常に水不足になっていました。日本での生活が当たり前のように感じてしまいましたが、実はとても恵まれた環境で生活をしているという事が身に染みて分かりました。このありがたみを一生忘れることがないようにし、未来にもこの環境またはそれ以上の生活が実現できるよう、SDGsへの関心を行動で示し、自分も貢献していこうと考えています。



語学学校の仲間と

信州つばさプロジェクトは、長野県の高校生が、信州に根ざした確かなアイデンティティと、世界に通じる国際的視野をもち、将来世界の様々な分野で活躍できる人材として成長できるよう、社会全体で留学への機運を盛り上げる仕組みをつくり、県と民間、協働で高校生の海外留学を支援することを目標とした事業です。



平成30年度から令和6年度まで、
のべ342名が海外渡航を実現しました！

ホームページ



信州つばさプロジェクトの詳細は、こちらの長野県のホームページから。



長野県教育委員会事務局
学びの改革支援課 高校教育指導係

(026) 235-7435

kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

学び応援キャラクター
「信州なび助」
©長野県教育委員会信州なび助